



校長室だより

校長 山崎 聡子

一生懸命に努力する

先日、3年生の体験学習として、SC相模原の方々（現役選手も含め）が来られました。2時間の学習時間のうち、1時間は外での運動、もう1時間は視聴覚室で講和をしていただきました。残念ながら私は所用のため参加することができなかつたのですが、後日、3年生の担任から講和の様子を聴くことができました。やりたいことを実現させていくための近道があるのかどうかという質問に対して、真剣な表情で「ありません。」と答えられ、毎日の生活の中で日々努力し一生懸命に取り組むことの大切さを伝えてくださったとのことでした。人並ならぬ努力によって、今の立ち位置をつかむことができた選手の方々の言葉には重みがあったことと思います。

今回の学習、そして日常では出会えない方々との触れ合いは、子供たちにとって心に残る大きな時間であったことと思います。

原因論と目的論

アドラー心理学という言葉が最近よく耳にします。アルフレッド・アドラーが築きあげた心理学です。アドラーは、目的論を大切にしていると様々な書物に記されています。

課題を解決したい時に、どこかに悪いところ（原因）があるから、それを直せばいいと考える原因論へのアプローチに私たちは慣れているが、意識を向けたところが強化されると考えたアドラーは、悪いところの逆を指摘すると意識がそこに向き、悪いところの逆の発生率が高まるという目的論に目を向けた。

事例：食卓をちらかす子供

（原因論）ちらかすたびに「やめなさい」と叱ったり、「自分で片付けなさい」と強く言ったりしていたら返って反発し、ひどくなった。

→子供にやる気が起きていない。

（目的論）外で遊び疲れた時など、ごくまれに(10回に1回程度)静かに食卓についていることがあった。そこで、「〇〇ちゃんありがとう。静かに座って食べてくれると、ママもパパもゆっくり美味しく食べられるよ。」と伝えるようにした。

→子供も静かに食卓につくことが増えていった。

子供たちと関わる時に、原因論でなく目的論で関わることを意識していくと、子供たちのよりよい育ちを促していけるのではないかと思います。できないところや悪いところを見つけて直させていこうとすることより、増やしたいところを見つけて価値づけていくことで、子供たち自身が安心して自分自身を受け止めることができるようになるのではないかと、そして、まだ表面にあらわれていない力が思わず発揮できるようになるのではないかと考えます。

大人である私たちでさえ、原因論で迫られれば苦しくなってきました。子供たちと向き合う時に、どこに意識を向けて、どんな話し方で接していけばいいのか常に考えていきたいと思っています。

yes but（それいいね。けれど、ここはだめ）でなく、yes and（それいいね。そして、これをしたらさらにいいね）で常に話す。

*太字斜字は、下記より引用

「幸せに生きる方法：平本あきお・前野隆司 著」